

## ロラン Charles Rollin の「学識(belles lettres)」の概念に関する一考察

A Consideration of the Concept of Charles Rollin's 'belles lettres'

中野和光

キーワード：学識(belles lettres)、ロラン(Charles Rollin)、リテラシー、カリキュラム

### 1. はじめに

2008年改訂の学習指導要領は、PISA型読解力の向上を目指している。PISA型読解力の背景にあるPISA調査は、義務教育修了段階の生徒が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価しようとするものである。具体的には、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について行われる。ここで、特徴的なのは、学力が、リテラシーという概念で捉えられていることである。学力を読み書き能力と関連づけて捉えることは決して現代に限ったことではない。17~18世紀には、学問のある人とは、man of lettersと呼ばれた。本稿は、17~18世紀のフランスにおいて、当時の中等教育のカリキュラムにおいて育てるべき力としての「学識(belles lettres)」の教授方法を著したロラン Charles Rollin の「学識」の概念を検討することを目的とする。

### 2. 17~18世紀のフランスの中等教育のカリキュラム

17~18世紀のフランスの中等教育は、次のタイプの学校によって行われた。一つは、大学附属のコレージュである。もう一つは、イエズス会の学校、もう一つは、オラトリオ修道会の学校である。この他に、俗間の聖職者による学校もあった。大学附属のコレージュは、貴族やブルジョアジーの子弟を対象にした学校で、大学の人文学部(Faculte des Arts)と一体不離であっ

た。生徒は9歳で入学し、第6級から第3級までは文法学級、第2級は人文学級、第1級は修辞学級であった。半数の生徒は修辞学級を修了すると卒業して行った。残りの半数の生徒は2年間の哲学学級に進んだ。哲学学級は大学入学準備コースで修了するとバシュリエ(bachelier)号を取得した。バシュリエの学位を得た者は、教授学位(maitre et arts)の試験に臨んだ<sup>(1)</sup>。

### 3. ロラン Charles Rollin の生涯

ロランは、1661年、パリで刃物研師の子供として生まれた。ベネディクト派の修道僧に見込まれて、奨学金を与えられ、第十八コレージュ College des Dix-Huit に学んだ。1683年、彼のレトリックの先生であったアルサン Hersan が、コレージュを去るとき、彼を後継者に指名した。22歳のときだった。1693年、32歳のとき、パリ大学の学長に選出された。3ヶ月毎の投票で8回連続して選出された。1697年、35歳のとき、家を建て、田園生活に入った。1699年、37歳のとき、ボアノアズ・コレージュ College des Beanoais の校長となった。彼は、カトリックの一派であるジャンセニズムに惹かれた。ジャンセニズムは国王や大学から圧迫を受けていた。1712年、彼は校長の職を辞し、再び、田園生活に入った。1720年、59歳のとき、再び、パリ大学の学長に選ばれた。再選はされなかった。それ以後は、公職には就かず、20年間、執筆生活を送った。1726~28年の間に、『学識を教え学ぶ方

法 (Traite des Etudes, The Method of Teaching and Studying the Belles Lettres)』4巻本を出版した。1737年、『古代史』全13巻を出版した。75歳のとき、『ローマ史』の執筆を始め、1741年9月、第8巻の原稿を印刷業者に渡したあと、病没した<sup>2)</sup>。

彼の「学識(belles lettres)」に対する考えとその教授法は、『学識を教え学ぶ方法』の中で伺うことができる。この書物を書く目的をロランは次のように述べている。

「本書の意図は、新しい学習計画を提案することでも、若者を教育する新しい規則や方法を述べることではない。パリ大学の実践を書く事である。」<sup>3)</sup>

#### 4. 『学識を教え学ぶ方法』の内容

ガウディン Albert C. Gaudin によれば、17世紀のフランスの理想的人間は、人文主義の理想とキリスト教の理想を兼備した、知識、徳、信仰を調和的に結合した紳士(正直な人) (honnete homme)であった。ロランは、この紳士(honnete homme)を教育の目的に翻訳している<sup>4)</sup>。

ロランによれば、教育の第一の目的は、学問と科学の学習を通して、心を飾ることである。心を飾るとは、科学、建築、絵、彫刻を含む文学の趣味を持った人(man of good taste)になることである。したがって、教育の第一の目的は、専門的な直接的にお金を稼ぐ知識ではなく、良い趣味に彩られた知識の伝達である。教育の第二の目的は、ロランによれば、徳のある人間の形成である。徳のある人間とは、良い息子、良い親方、良い友、良い市民であるということである。科学は、徳に導くときのみ価値がある。良心なき知識は魂の破壊である。教育の第三の目的は、ロランによれば、よいキリスト教徒の形成である<sup>5)</sup>。

教育の目的を構成する趣味とは何かについて、ロランは、次のように述べている。

「趣味とは、著作を読んだり、作文したりすることに関して、ディスコースを構成する思考と表現のすべの美、真理、正しさを明確に、生き生きと、明白に識別することである。」<sup>6)</sup>

ロランの『学識を教え学ぶ方法』4巻本は、次のように構成されている。

- 1 言語の学習(フランス語、ギリシャ語、ラテン語)
- 2 詩
- 3～4 レトリック
- 5 歴史
- 6 哲学
- 7 コレージュの管理

以下、この構成にしたがって、ロランの考える中等教育で形成されるべき「学識(belles lettres)」の内容について検討してみよう。

#### 言語の学習

言語の学習を構成するのは、フランス語、ギリシャ語、ラテン語である。

##### ○フランス語

フランス語、ギリシャ語、ラテン語の学習の順序については、フランス語から学習すべきである。フランス語の学習の内容は、フランス語の文法の規則の学習、フランス語の著作の読解と説明、(ラテン語からフランス語への)翻訳、フランス語による作文の4つである。

##### ○ギリシャ語

最初にギリシャ語を学習することの有用性と必要性が説明されている。その上で、ギリシャ語の教授方法が説明されている。

##### ○ラテン語

ラテン語の教授方法についてロランは次のように述べている。

ラテン語の学習で最初に教えられる規則はフランス語でなされるべきである。知られていること、明白なことから、知られていないこと、あいまいなものに進むのが自然である。それから、著作の説明に進むべきである。

第6級と第5級で説明されるべき著作、第4級、第3級、第2級で説明されるべき著作があげられ、上級

のクラスにおいては、著作の説明において、求められること、ラテン語を話させる習慣をつけること、記憶の改善の方法、が述べられている。

## 詩

作詞法、詩を読むこと、詩の種類について説明している。とりわけ、ホーマーの詩について生徒に正しい判断をする方法、ホーマーの詩から引き出される教訓について詳しく説明されている。

## レトリック

ロランによれば、雄弁は生まれつきの素質が主要な基礎であるが、先人の指針や技術は、良いものと悪いものとを識別するのに役立つ。このような指針の源泉として、ロランは、アリストテレス、ディオニシウス、ハリカリナッセン、ロンギニス、キケロ、クインティリアヌスをあげている。

作文については、もっとも難しいものであるだけでなく、もっとも重要なものであり、残りのすべての学習の目的と範囲である。作文に成功するためには、他のクラスで学んだ著作の中から多くの術語や言い回しを収集すべきである。

作文の主題は、言うべきことを教えるために教師が生徒に示す一種の計画である。作文の材料はよく研究され、用意されなければならない。作文の添削もレトリックの教師の重要な仕事である。

作文を教えるもっともやさしい方法は、最初に、言葉で言わせることである。しばらく、このやり方で作文(compose)させた後、ある主題を与えて、今度は書かせてみる。この場合、それらは、最善の著作の中から選ばれ、家庭でも学習できるものであるべきである。

諸著作を読み、説明する場合に求められることが説明されている。

法廷における雄弁術が説明されている。法廷の弁論のモデルが示され、それに用意させる方法が説かれている。

キリスト教の説教の雄弁が説明されている。説教する場合の義務と、キリスト教の説教に必要な学問とし

て、聖書と教父の学習が必要であると述べている。

キリスト教に関する作文の書き方も説明されている。

## 歴史

ロランによれば、歴史が、時代の光、出来事の倉庫、真理の忠実な証拠、分別とよい助言、行為と作法の規則、としてみなされてきたことには理由がある。歴史は、人類の共通の学校である。よく教えられるときには、それは、すべての人類にとって道徳の学校となる。

ロランは、歴史の説明を三部に分けている。第1は、確かな栄光と真の偉大さについての趣味、第2は、キリスト教史、第3は、世俗史である。

第1部の偉大さについての趣味は、富と貧困、建物、家具、衣装、用具、飲食の贅沢、名誉、威信、勝利、生まれの高貴さ、能力、名声、を扱い、確かな栄光と真の偉大さがどこにあるかを問っている。

第2部のキリスト教史は、キリスト教の歴史を理解するのに必要な原則として、キリスト教の歴史の性格と有用な観察が説明され、この原則に基づいて、いくつかの諸例が述べられている。

第3部の世俗史は、世俗史の学習に必要な規則と原則が最初に説明されている。

それらは、次のとおりである。

世俗史に必要な順序と方法、諸国の法律、作法、慣習に関連する事柄の観察、真理の探究、出来事の原因の発見、人々と偉人の性格の学習、道徳性と生活上の行為の観察、宗教に関連するあらゆることの注意深い観察、である。これらの原則に基づいて、ベルシャ史、ギリシャ史、ローマ史、が説明されている。

## 寓話

ロランによれば、寓話の起源は歴史にある。寓話は歴史にもとづいて書き換えられたものである。寓話の有用性は、第1に、キリストに負っているものを若者に教え、第2に、異教徒の馬鹿な儀式や邪悪な格言、キリスト教とその道徳の尊厳さを発見させることにある。

## 古代の文化

古代の時間の尺度、距離の尺度、古代の貨幣、等の古代文化を学習することは、古代人に知られていないことを発見させたり、学問のある人間に払われる尊厳を理解させる。

## 哲学

ロランによれば、人間が何であるか、いかなる条件の下で、その存在があるか、いかなる義務を負っているか、どちらに向かうべきか、いかなる目的のために人間は作られたのか、といったことが哲学の主題である。これらの問いが正しく追究されるとき、

- ①哲学は、行為を規制するのに役立つ。
- ②哲学は理性を完成させる。
- ③哲学は、知識の無限で心を飾る。知識の無限の中に、植物、花、果物、木、動物に関する知識が含まれる。
- ④哲学は、宗教の尊厳を鼓舞するのに役立つ。

## 学級とコレッジの管理

学級とコレッジの管理については、ロランは、次のことを述べている。

### 1. 若者の教育に関する一般的考察

- ①教育の目的の設定
- ②子どもたちの性格の研究
- ③子どもたちに直接的な権威をもつこと
- ④自身を愛され、畏怖されるようにすること
- ⑤矯正の不便と危険、矯正において守られるべき規則
- ⑥叱責、懲戒について
- ⑦子どもたちとともに推理し、名誉の感覚によって彼らを進級させ、賞賛、褒章、愛撫を用いる。
- ⑧子どもたちを真理の厳密な観察に慣れさせる。
- ⑨丁寧、清潔、正確に慣れさせる。
- ⑩学習を同意できるものにする。
- ⑪休憩とレクリエーションを認める。
- ⑫徳に向かって訓練する。

### ⑬救済への敬虔と宗教と熱情

## 2. 校長の義務

- ①生徒の食事
- ②学習
- ③コレッジの規律
- ④教育
- ⑤宗教

## 3. 教師の義務

- ①学級の規律
- ②生徒が読んだ著作と彼らの学習の主題であったすべてについて、学級の中、あるいは、私的に、説明させる。公の場で、少年を育てるもっとも平易で、もっとも自然で、もっとも利点のあるやりかたは、彼らに著作の説明をさせることである。
- ③作文と公共の行為。この場合の作文は、教師が大学のために、偉大な王子、将軍、大臣、行政官の名前と行為について韻文または散文で祝福することである。
- ④マスターの学習
- ⑤いくつかの個別的規則の学級の管理への応用

## 4. 両親の義務

## 5. 個人指導の教師の義務

## 6. 生徒の義務

以上が、ロランの4巻本の概略である。バーナード H.C. Barnard によれば、この4巻本は、パリ大学のすべてのコレッジに適用可能な計画を書いた、大学の教師のためのハンドブックであった。出版されて、フランス革命を経た、1838年、「ロラン以降、教育関係には進歩がない」、1861年には、「ロランの4巻本は、(価値ある) 唯一の書物である」と書かれた<sup>7)</sup>。

ロランのこの書物が、革命を経て、教育に関する唯一の価値ある書物として、19世紀にその名声を持ちえたのかについて、ガウディンは、次のように述べている<sup>8)</sup>。

革命前に、ロランの本が教授たちに受け入れられた

のは、それが大学が従うものをふくんでいたからである。リベラル派の教授たちも受け入れたのは、大学が受け入れなかった変化を含んでいたからである。

革命後、中等教育はリセで行われるようになった。その教育は旧タイプの教育であった。その教育を受けさせるのは、子どもを専門職につかせるという人々に限られていた。その理想の人間は、正直な人、紳士(honnete homme)であった。中等教育の目的は、ある特別な教科を教えることではなく、一般的な文化を与えることである、という点において、正直な人、紳士(honnete homme)の形成という教育の目的は十分にリセにおいて生きていた。

## 5. ロランの「学識」の概念

ロランの考える「学識」とは、修辞学級の卒業生については、第6級から第1級までに修得した、フランス語、ギリシャ語、ラテン語、詩、レトリック、歴史、寓話、古代の文化、哲学級の卒業生については、これらに加えて、哲学級2年間で修得した内容をさす。これらの学習を通して、良い趣味を持った、徳のあるキリスト教徒、それが、ロランの目指す「学識(belles lettres)のある人」であった。哲学級を終了した後、神学部、法学部、医学部に進学した学生の学識は、それぞれの専門分野に関して修得したものを学識と考えるだろうから、ロランの「学識」は、中等教育の「学識」である。

読み書くという視点から、ロランの学識を検討してみよう。

ロランは、教師の義務の中で、生徒に読んだ著作と学習の主題のすべてについて、学級の中、あるいは、私的な場で、説明させることを求めている。そして、これが、生徒を育てるもっとも平易で、自然で、利点のある方法であると述べている。

この点について、ガウディンは、ロランにとって、読解とは読んだ著作を説明することであったと述べている。ガウディンによれば、修辞学級においては、最終学年として、流暢に話せなければならなかった。作文は重要ではあったが、読解—説明ほどではなかつ

た<sup>9)</sup>。

教授法について、ガウディンは、次のように述べている。

修辞学級の場合、教授法はラテン語の聞き取りであった。その内容は、与えられた考えを表現する規則からなっていた。哲学級の場合、ラテン語で書かれたテキストを教師が読み上げるのを書き取るのは同じだが、その後、長い討論が行われた。その討論の目的は、古い形式論理学の規則にしたがって、討論のテクニックを獲得することだった。道徳、形而上学、宗教と結合した哲学は大学当局から禁止されていた<sup>10)</sup>。

パリ大学の授業時間は、1600年を例にとると、1日6時間で、そのうち1時間は、原則と規則の学習(暗記)、残りの5時間は、著作の読解と説明、そして、作文であった<sup>11)</sup>。

ロランの考える学識(belles lettres)は、読み書くという視点から見ると、修辞学級までの場合、ラテン語、ギリシャ語で書かれた詩、歴史、寓話、文化等に関する古代の著作とフランス語の著作の知識、それを理解し、公の場で説明できること、そして、読んだことをもとにして、自分の考えを表現する作文からなっていた。

ロランの考える学識には、体育や実際的問題の解決に役立つ知識の教育は含まれていない。この点は、体育や一般教育としての職業教育や専門教育として職業教育を教える現代のカリキュラムとは異なっている。現代のカリキュラムとの違いでもう一つ大きなものは、現代のカリキュラムにおいて、教科として宗教を課している国は多くはない。ロランの考える学識を育てるカリキュラムはキリスト教教育を大きな柱としているから、この点は大きな違いである。

一方、ロランの学識の概念には、現代と連続する面もある。それは、読むことと書くことを学識の中心としていることである。その学識は、ラテン語、ギリシャ語で書かれた古代の著作、フランス語で書かれた著作を読み、理解し、説明し、自分の考えを作文で表現することのできる徳のある紳士を育てることを目指している。現代のカリキュラムも、PISA型学力に見られ

るように、読むことと書くこと、リテラシーを中心としている。この点では、ロランの学識概念とリテラシーを重視する現代の学力は連続している。

1973年に、心理学者マクレランド David C. McClelland は、「知能のためではなく、コンピテンスのためのテスト」<sup>(12)</sup>という論文を発表した。その中で、マクレランドは、成果や業績に関わる能力を測定するテストを提唱した。マクレランドのこの提案は、企業の人事担当者によって、「コンピテンシー（特定の職務において高い業績をあげ続けている人に固有の行動特性）評価」<sup>(13)</sup>として受け入れられるようになった。

経済協力開発機構（OECD）の「キーコンピテンシー」は、経営学のこのコンピテンシー概念を背景としながら、経済的成功だけではなく、すべての人に共通に形成すべき能力として提案されたものである<sup>(14)</sup>。PISA調査は、OECDの「キーコンピテンシー」のあげた3つの能力のうち、道具を相互作用的に用いる能力の一部を測定しようとしたものである。

この背景から伺われるように、PISA型学力には、企業において高い成果や業績をあげる能力への志向が存在する。この意味で、現代のPISA型学力は、知識基盤社会で成功する人生に準備させるためのものである。この点は、科学、建築、絵、彫刻、を含む文学の趣味を持った徳のある人間をそだてようとしたロランの学識と大いに異なる。

学識を育てる方法については、読んだ著作と学習した主題の全てについて、公の場（同級生と両親の前）で発表させることを、最も平易で、自然で、利点の多い方法であると述べていることが注目される。

## 6. ロランの「学識」概念に関する主要文献

ロランの4巻本には、さまざまな版があるが、ここでは、復刻版の次の版を用いた。

①Charles Rollin, *The Method of Teaching and Studying the Belles Lettres: an introduction to languages, poetry, rhetoric, history, moral philosophy, physics,...* Designed more particularly

for students in the universities, The eleventh edition, Volume 1 of 4, Dublin, printed for J. Beatty, 1778, Gale ECCO Print Edition.

②Charles Rollin, *The Method of Teaching and Studying the Belles Lettres: an introduction to languages, poetry, rhetoric, history, moral philosophy, physics,...* Designed more particularly for students in the universities, The eleventh edition, Volume 2 of 4, Dublin, printed for J. Beatty, 1778, Gale ECCO Print Edition.

③Charles Rollin, *The Method of Teaching and Studying the Belles Lettres: an introduction to languages, poetry, rhetoric, history, moral philosophy, physics,...* By Mr. Rollin, ... Translated from French.... The sixth edition. Volume 3 of 4, Edinburgh, printed for A. Kincaid & J. Bell, W. Gordon, and W. Gray, 1768, Gale ECCO Print Edition.

④Charles Rollin, *The Method of Teaching and Studying the Belles Lettres: an introduction to languages, poetry, rhetoric, history, moral philosophy, physics,...* Designed more particularly for students in the universities, The eleventh edition, Volume 4 of 4, Dublin, printed for J. Beatty, 1778, Gale ECCO Print Edition.

ロランには、この4巻本のほかに、9歳までの子どもの教育と女子の教育を論じた次の文献がある。

⑤Charles Rollin, *New Thoughts Concerning Education*, by Mr. Rollin.... Being an introduction to the belles lettres. Done from the French, with notes, Dublin, printed for R. Reilly, G. Risk, G. Ewing, and W. Smith, 1738, Gale ECCO Print Editions.

ロランの教育論を研究した書物には次の文献がある。

⑥Albert C. Gaudin, *The Educational Views of Charles Rollin*, Columbia University, 1939.

フランス教育史であるが、次の書物はロランについて1章をさいて述べている。

- ⑦H.C. Barnard, *French Tradition in Education*, Cambridge University Press, 1922.  
バーナードは、次の書物の中で、フランス革命前の教育について、述べている。
- ⑧H. C. Barnard, *Education and the French Revolution*, Cambridge University Press, 1969.  
フランス革命前のコレージュのカリキュラムについては、次の文献が触れている。
- ⑨世界教育史研究会編『フランス教育史 I』講談社、1975年。

### 註

- (1) 『フランス教育史 I』64-65 ページ
- (2) Gaudin, pp.1-8
- (3) Rollin, vol.1, p.53.
- (4) Gaudin, pp.9-16.
- (5) Rollin, vol.1, pp.3-39.
- (6) Ibid., p.41.
- (7) Barnard, *French Tradition in Education*, pp. 84- 218.
- (8) Gaudin, op.cited.,p.112, pp.122-123.
- (9) Ibid., p.91.
- (10) Ibid., pp.92-93.
- (11) Ibid., p.35.
- (12) David C. McClelland, *Testing for Competence Rather Than for "Intelligence"*, *American Psychologist*, January 1973, pp.1-14.
- (13) 高木史朗『コンピテンシー評価と能力開発の実務』日本コンサルタントグループ、2004年
- (14) 松下佳代「コンピテンシーを中心とする能力概念の検討」教育目標・評価学会編『「評価の時代」を読み解く』(下)、日本標準、2010年 参照